はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　No.28　al museo

夏鳥として春に渡ってきたツバメが、多摩川上空を実に気持ちよさそうに飛翔している風景が目立ちます。頭部や腹部はスズメほどの大きさにもかかわらず、翼や、フォークのように尖った尾が長いために滑空している時の姿は鋭く、たくましく見えます。実に格好の良い鳥なのです。

常設展示の野鳥たち　1

ツ　バ　メ
Hirundo rustica
スズメ目ツバメ科
（常設展〝多摩川の野鳥〟から
バードカービングのツバメ）

ツバメは、空中を自由に飛び回りながら昆虫類を捕らえています。また、人を恐れることなく、人家や商店街の軒下に営巣し、繁殖します。こうした習性ゆえ、もっとも身近な野鳥として、昔から親しまれてきました。特に水田耕作の歴史が長い日本では、水辺において飛翔昆虫を捕食するツバメを益鳥として大切にしてきたのです。

都会においても、皇居のお濠などの水辺で餌を採る様子や、丸ノ内や有楽町のビル街で営巣する姿も見られ、実に多くの人々に見守られながら繁殖していることがうかがえます。

府中では、4月から6月にかけて多摩川、および多磨霊園内を中心によく見られ、特に多摩川是政橋と大栗川の合流地点付近では、10月下旬まで確認されています。（昨年度・府中野鳥クラブの報告から）

もちろん都心部同様、小中学校や商店の軒先には、かえったばかりの雛に餌を運ぶ親ツバメの姿も見つけることができます。ツバメが、こうした人間に近い環境で営巣するのには理由があります。雛や卵を狙うカラスや、巣を横取りしようとするスズメなどの天敵が、決して近づこうとしないからです。まさにツバメの営巣は、人間の存在を利用した繁殖戦略と言えるでしょう。

近年の地価高騰により営巣に適したビルが壊され、新築ビルは巣材である泥の付着が困難であったりして、都心部のツバメが減少しているようですが、最大の原因は、彼らを守る都市の住人が少なくなったためではないでしょうか。

（N）

市制40周年

府中市 水木しげる原画展

展示会案内

—日本の妖怪—

平成６年５月29日(日)～７月３日(日)
会場：特別展示室・旧越智家住宅

かって人々が日常的にその存在を感じ取り、ともに暮らしていたはずの〝妖怪〟。無機的な都会に生きる現代人にはもはや縁遠いもののようですが、「見えない、だが確かに〝いる〟」のだと感じ取り、その世界を描き続けてきた奇才水木しげる。その漫画が世代を越えて人気を集めているのは、現代日本の社会が排除し、また忘れようとしてきたものがそこには豊かにあるからなのです。

本展覧会は「見えない、だが確かに〝いる〟」というものに焦点をあて、第１会場（博物館内特別展示室）内に水木氏の原画を展示し、また第２会場（園内、旧越智家住宅）内で不思議な世界のお話を聞かせることによって〝目に見えない世界〟というものを感じ取っていただきたいと考えています。

≪第１会場の見どころ≫

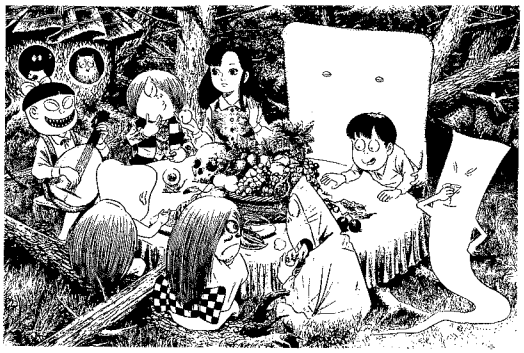
数多くの作品を描き続ける水木しげるの作品の中から妖怪に関する原画約120点、それらを立体的に再現したジオラマなどを展示します。この他、今回の展覧会に合わせて、水木氏が収集している世界の精霊をかたどった木彫りの人形やお面など約30点を展示し、あわせて精霊信仰についてパネルで解説することにより、水木しげる・妖怪の世界の原点を探ります。

≪第２会場の見どころ≫

郷土の森の〝のんのんばあ〟が案内する妖怪の世界。〝のんのんばあ〟とは水木氏に不思議な話を聞かせてくれた近所のおばあさんのことで、お化けの教師ともいえる存在。そこで、毎月第２土曜日の森のお話会でおなじみの十べえお話の会のメンバーが郷土の森オリジナル〝のんのんばあ〟として、第２会場で妖怪の世界やお化けの話を語ります。

（※お話の時間：期間中の月曜を除く毎日、午前11時～、午後１時半～、２時半～の３回。）

この他、家や里にすむ妖怪のジオラマをリアルに再現し、会場内に展示します。何の妖怪がいるかは見てのお楽しみ!!　（K）



『円卓を囲む鬼太郎一家』　©水木プロ

予告

府中市自然調査団25周年記念企画展

府中の自然展

７月31日(日)～８月31日(水)

昭和44年、急速に後退しつつある府中市の自然を把握し、基礎データの収集を行い、自然教育への展開をはかる目的で、府中市自然調査団が発足しました。

府中にはどのような生物が生息しているのか、また、府中の地形はどのような過程で現在の姿になったのか、など自然に関する基礎的な情報の集積は、すべてこの自然調査団の地道な活動によるものなのです。

調査団結成から25年を経過した今日、郷土の自然ははたして変貌を遂げたのでしょうか。90年代現在、府中の自然の中で一番興味深い部分を、植物・昆虫・野鳥・地理の各分野から選び出し、収蔵標本を中心に展示紹介していきます。合わせて府中市自然調査団25年の調査活動を振り返るとともに、ここでもう一度、自然を認識し直すきっかけを提供できればと考えています。

（N）

身近な　歴史入門講座　その３

個人の情報にたどり着くためには人名こそ最大の手がかりと言えます。自分の先祖の名を知るには連綿と書継がれてきた系図がある、という家は別として、墓石、位牌等なら江戸時代末位まで遡れる家も多いのではないかと思われます。古い墓石から文字を読取るのは大変ですが、ほぼ確実に、こういう名前の人がこの時代に生きていたというデータが拾えます。もっとも、古い墓には戒名だけで俗名が無く、ちょっと困る事もあります。こういう時はその寺の過去帳を拝見できれば解決される場合もあるのですが、過去帳というのは寺院にとって最重要の書類ですからみだりに見たがらず機会を待つべきでしょう。そしてもし見ることができたら、その俗名と同じ名の人を探してさらに過去へ遡ってみることです。

現在では生涯に一つの名前というのがほとんどですが、江戸時代は庶民でも時に応じて名乗りを変えていました。家督を継ぐ者が代々名乗ることが多いその家の名もあって、それを辿ると一家の流れが見つけられる場合があります。

しかし、もし個人の名が判ったのなら、もう少し横の拡がりをもって、社会の中でその人物が見られる可能性はないのでしょうか。宗門人別改帳とか宗門人別帳と呼ばれる史料があります。これは寺院とその過去帳に記されている人々、いわゆる檀家との関係が密接であり続けた背景と大いに関係のあるものです。人別とは〝人ごとに〟とでもいう意味で、各人がどの宗門（宗旨）に属しているかを書き上げたものです。江戸幕府はキリシタン禁止政策のためにその初期から幕領の人々にこの調査を行なっていましたが、寛文５(1665)年からは諸藩にも命じたので、日本中の者が皆、檀那寺からこの者はキリシタンではない、と身元を請合ってもらう〝仏教徒〟になったのです。

領主によって記載の項目や方法に差はありますが、幕領では家ごとに家族や奉公人の名前、年令、檀那寺の印の他、持高、牛馬数、奉公人の出身地、年季等多くの個人情報を含んだものを毎年提出することになっていました。これは宗教的書類というのみならず、戸籍の役割を果たす行政文書でもありました。

宗門人別帳の一例

また、これを取りまとめるのは名主など村役人と呼ばれる村の中心的な人々で、帳面にして代官所に提出されたので、その控は村の重要書類の一つとして村役人の所に保存されることになります。各地の文書の残存状態を見ても宗門人別帳は比較的見受けられ、地域の基本史料の一つです。

村役人をされた様な家には人別帳に限らず、その村に関わりのある文書類が集まっていましたが、明治維新の時、行政的に公共機関が引継がなかったので、その家でそのまま大切に保管されたものもあれば、その後散逸したものもあります。ここ20～30年の間に自治体等によって再び調査、収容、保存等が盛んに行なわれる様になり、当館でもかなりの文書を保管しています。これらの中には人名の残されているものは結構有るのです。これらの古文書は、府中では「府中市郷土資料集」の様な形で活字化し、できるだけ多くの人の利用に供しようと努力していますが、その量にはなかなか追いつけませんし、個人情報の公開という別の問題も生じます。次回はこの地域に残された史料を個人がどう利用できるかについて考えてみます。　　（B－ha）

国府のなかの多磨寺と多磨郡衙

深澤　靖幸

1

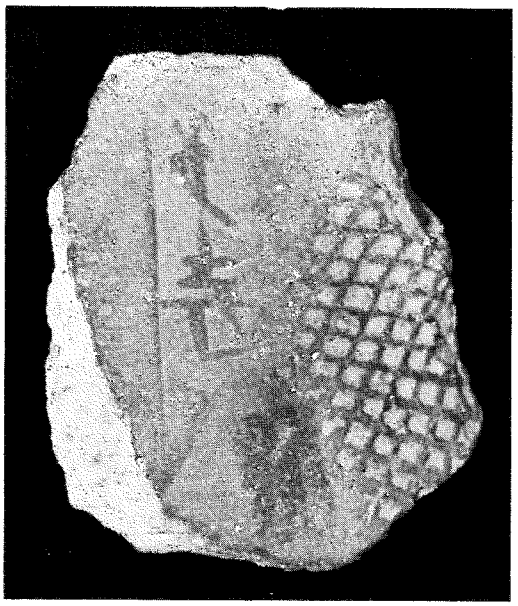
武蔵国多磨郡の郡司である大伴赤麻呂は、天平勝宝元年（749）に死んだが、翌年黒斑（まだら）のある牛に生まれ変わってしまった。その黒斑をたどると「赤麻呂は生前自分が建てた寺の財物を使い、返さないまま死んでしまった。その負債を返すために牛に生まれ変わった」と書いてあった。……

これは、奈良時代末から平安時代初めの仏教説話集『日本霊異記（りょういき）』に収められた話（中巻第9）の一部です。いうまでもなく因果応報（いんがおうほう）を説くこの内容が史実であるはずはありません。しかし、仏教説話であればこそ、現実とかけ離れた舞台設定では説得力がありません。ここで興味を引くのは、多磨郡司（ぐんじ）、大伴赤麻呂が建立したという寺院です。

2

右の写真は、たて14cm、よこ11cmほどの平瓦の小さな破片です。鏡に写して見てください。「多寺」と読めます。これは、「多寺」と掘り込んだ木の板を、焼き上げる前の瓦に押し付けた文字です。

瓦は昭和初期に大国魂神社東側の宮町２丁目付近で採集されたもので、当時から寺院の名称を記した資料として注目されたようです。故大場磐雄氏は「多摩寺」を略したもので、上記の説話を引いて郡司が建立した寺院と考えられています。



「多寺」の瓦

郡司が建立したかどうかはさておき、郡名を冠した寺院の存在は、同じ『日本霊異記』の中に３つあり、下表のように文字瓦や墨書（ぼくしょ）土器によっても確認されています。したがって、大場氏の指摘のとおり「多寺」はまさしく多磨寺であり、古代寺院が付近に存在したと考えられます。

3

では、この多磨寺はどのような性格の寺院だ

（国名）	（郡名）	（遺跡名）	（郡名寺院を示す出土文字資料）
常陸	茨城	茨城廃寺	「茨城寺」「茨寺」墨書土器
常陸	新治	新治廃寺	「新治寺」「大寺」ヘラ書瓦
常陸	那賀	台渡廃寺	「仲寺」墨書土器、「徳輪寺」ヘラ書瓦
下総	結城	結城廃寺	「法成寺」墨書土器（結城寺か）
上総	武射	真行寺廃寺	「武射寺」「木寺」墨書土器
河内	安宿	円明廃寺	「安宿寺」「安寺」墨書土器

ったのでしょうか。まずは『日本霊異記』に見られる郡名寺院や各地の類似遺跡の状況などから手掛かりを探ってみましょう。

『日本霊異記』に登場する郡名寺院の一つ備後国の三谷寺は郡司の祖父が建立した寺院でした（上巻第7）。郡司層が建立した寺院は天平5年(733) 完成の『出雲国風土記』の中にも名称不明ながらいくつか見られます。こうした史料から、郡名寺院は郡司層が建立したものと一般に考えられます。

さらに、先に掲げた表中の「新治寺」や「安宿寺」の隣接地では郡衙が発掘され、「茨木寺」や「仲寺」では郡衙と推定される遺跡が隣接していますので、この理解は有力です。

したがって、多磨寺も郡司層建立寺院と考えるのが最も自然のようです。

しかし、この寺院の性格を考えるうえで複雑なのは、「多寺」の瓦の採集地が大国魂神社東側の宮町２丁目付近であることです。本誌№19～24に連載の「武蔵国府のはなし」で紹介したように、同所では大型の掘立柱建物や礎石建物の跡とそれを取り囲む大規模な溝が発掘され、加えて国内の郡名を記した瓦が多数出土しており、国府政庁（国庁）を中心とした一画と目されているのです。ですから、そこに存在した寺院は国府政庁に隣接することになります。

国府政庁周辺や国府内に寺院遺跡が存在する事例は他国にも以外と多くあり、国分寺とは別の国府に付属した寺院が存在したものと理解されています。

とすると、この寺院は郡司層建立寺院と国府付属寺院の両方の要素を兼ね備えているといってよいでしょう。

したがって、その性格の選択肢は、郡司層建立寺院か国府付属寺院かという二者択一に止まらず、当初郡司層によって建立されたものが国府付属寺院に転用されたとか、あるいはその逆のようなケースを考える余地もあるのです。そしてまた、郡名寺院だからといって必ずしも郡司層建立寺院ではない事例があることも忘れてはならないでしょう。『日本霊異記』(中巻第31)に記された郡名寺院、遠江国磐田寺は国司や郡司らによって建立されているのです。

多磨寺の性格については、発掘調査によって、国府政庁の建設と寺院の建立に時期差があるのか、それぞれがどのような変遷をたどるのか、といったことが明らかにならない限り特定することはできないようです。

4

しかし、昨年幸いにも、この問題を考えるうえでの手掛かりが隣接地で発見されました。大国魂神社の北東、府中駅南口再開発の用地です。本誌№26の「最近の発掘調査から」で紹介されていますが、竪穴住居跡から「多研」と墨書された陶製の硯の破片が見つかったのです。「研」は硯と同義で「多研」は多硯と同意です。「多寺」を多磨寺の略と考えたのと同じように、この場合も多磨の硯、すなわち、多磨郡衙の硯の意味と考えられます。墨書は郡衙の備品であることを示すのでしょうから、必然的に多磨郡衙が付近に存在したということになります。

国府政庁に隣接して多磨寺が、そしてその周辺に多磨郡衙も存在したと考えられるのです。そして、郡衙に隣接する郡名寺院は少なくとも、郡司層によって建立されたと考えて間違いないでしょうから、多磨寺の建立者は多磨郡司と想定されるのです。『日本霊位記』の舞台設定の史実性には不安を残しますが、大伴赤麻呂を建立者にあてることもあながち無理ではないと思います。

ついでながら、国府とその所在郡衙の位置関係が発掘調査で明らかになった例はありません。『出雲国風土記』に国府政庁と意宇郡衙が隣接していたことを示す記述が唯一、この関係を考える材料でした。むろん、遺跡としての多磨郡衙は未発見ですが、「多研」墨書資料の発見は大きな意味をもつといってよいでしょう。そしてまた、各国で国府付属寺院と目されているものの多くは国府所在郡の郡司層によって建立された郡衙隣接寺院である可能性も指摘しておきたいと思います。

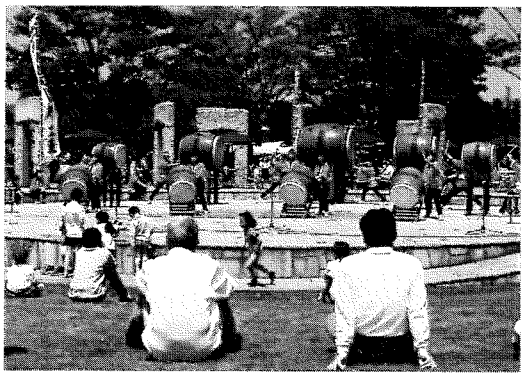
カメラアングル

郷土の森・森のコンサート

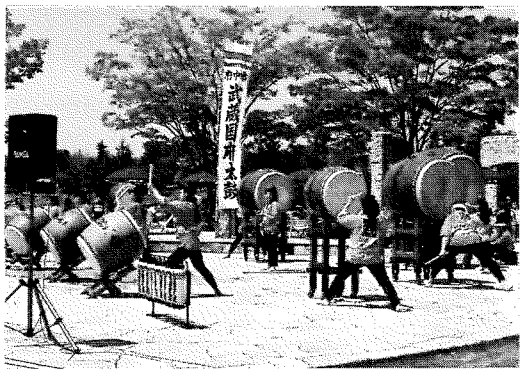
ゴールデンウィーク 日韓太鼓の競演

4/29 武蔵国府太鼓

オープニングはご存じ〝乱れ打ち〟から。好天にも恵まれ、ノリもよさそう



クライマックスは〝分倍河原合戦太鼓〟。たたみかけるように、バチを持つ腕がしなる。大地が連動する。これが府中の伝統芸能だ！



メインは〝農楽〟。農業に関連する行事の際に演奏されるこの伝統音楽は、歌あり、踊りありで見応え充分。約20分を動き続けたメンバーの皆さん、お疲れ様でした。 ▶

5/5 韓国朝鮮伝統音楽

野外ステージまでの道のりをパレード行進。園内のお客さんもびっくり！

まずは、楽曲〝サムルノリ〟を演奏。つづみ状の太鼓をリズミカルに連打する。

自然科学に親しもう！

●4月10日 自然観察会「サクラと春の野草」

お馴染み、春の自然観察会。多磨霊園から浅間山までの野草探索コースを歩きました。季節も天気も絶好調、講師の舌も絶好調で、「え～このサクラは……」

●5月10日 天文講座

年間を通して天文の世界を満喫しよう。夜空の星を自由に眺めるために、なくてはならない望遠鏡。まずはこのメカニズムと使い方から勉強しましょう。講師の話に聞き入る子供たちの真剣な表情をごらんください。
早く星の世界に連れて行ってよ！

【平成5年度の利用状況】

（H5.4.1～H6.3.31） 開園日数337日

区分		有料 一般	有料 団体	減免	合計
入園者	大人	146,301 人	9,432 人	8,517 人	164,250 人
	子供	37,203	21,515	2,268	60,986
	小計	183,504	30,947	10,785	225,236
博物館入館者	大人	30,478	6,186	3,642	40,306
	子供	10,929	15,448	408	26,785
	小計	41,407	21,634	4,050	67,091
プラネタリウム観覧者	大人	49,811	4,477	1,208	55,496
	子供	23,128	17,878	1,194	42,200
	小計	72,939	22,355	2,402	97,696
合計		297,850	74,936	17,237	390,023

【平成５年度 寄贈・寄託資料一覧表】

■寄贈資料

	寄贈者	資料名	分類	数量	備考
1	大谷　勉	緑釉軒平瓦片	考古	1	京都出土
2	関　英馬	瓦片　他	考古	14	下野薬師寺出土　他
3	越智又一郎	板碑片	考古	1	市内南町出土
4	越智又一郎	二ツ組簞笥	民俗	1組	
5	荒井常司	雛人形一式、五月人形一式　他	民俗	1括	
6	荒井鎮雄	天秤　他	民俗	3	
7	田中　清	フルイ、背負い籠、　他	民俗	54	
8	小川賢一	土入れ、箕、鍬　他	民俗	47	
9	小沢正次	苗取り台、フリマンガ、鍬　他	民俗	38	
10	矢島　中	コテ（電気鏝）	民俗	1	
11	萩原徳一	念仏講(府中新宿中組)関係資料	民俗	1括	寛政８年(1796)銘の鉦
12	長堀三郎	念仏講(府中新宿上組)関係資料	民俗	1括	明治９年(1876)銘の鉦
13	林　繁	衣服関係資料	民俗	1括	
14	岡本道男	耳栓、双子円板　他	考古	10	埼玉県上尾市出土

■寄託資料

	寄託者	資料名	分類	数量	備考
1	番場自治会連合会	番場宿御祭礼其外勘定帳	歴史	4冊	明治７年～昭和４年横 帳木 箱入

インフォメーション

郷土の森の 新 刊 紹 介

■府中市郷土の森紀要　第７号

「府中の自然（水）とくらしに関する調査報告」「武蔵府中三千人塚についての覚書き」「武蔵府中三千人塚遺跡の再検討」「新田義貞伝説雑感」の研究論文掲載。Ｂ５ 1200円

■大国魂神社社叢の研究(府中市郷土資料集15)

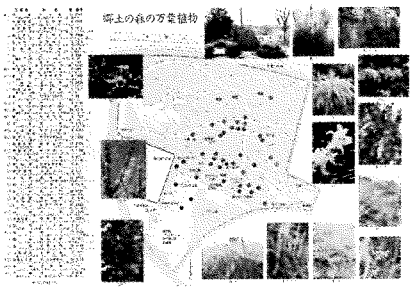
大国魂神社の社叢を構成樹種の視点からとらえた、その変遷と現状。　Ａ５ 2400円

■武蔵国府名蹟史（府中市郷土資料集16）

大正５年に発刊された府中近傍名蹟案内書の復刻。　Ａ５ 1700円

園内・万葉植物マップを発行

郷土の森園内散策のガイドにご利用ください。万葉集に詠われた草木・花々を、園内39ヵ所に紹介しています。府中市内の万葉植物リストも掲載。博物館内にてお問合わせください。



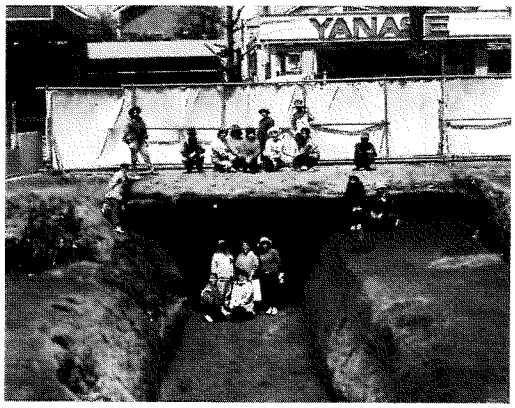
＝最近の発掘調査から＝

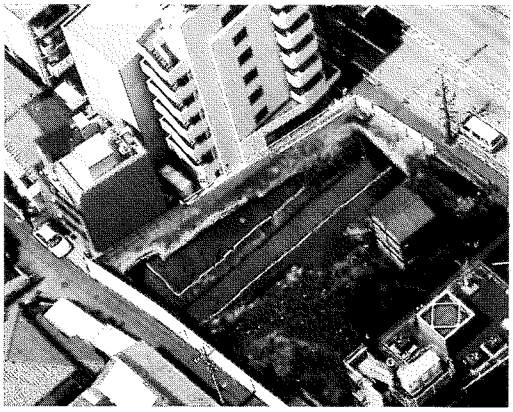
今回のお話は、京王線東府中駅北側で見つかった、L字形に屈曲する奈良時代の大型の溝についてです。

場所は、東京競馬場から東府中駅の西側をとおり北へ向かう平和通りと国道20号線の交差点の東側にあたります。この付近は、これまでは東府中駅周辺に広がっている縄文時代や、古代の集落の外縁部にあたるものと考えられ、主にお墓などが見つかる場所と捉えられていました。

しかし今回の調査で、なんらかの建物を区画、ないし守るために設けられたとしか考えられないような、奈良時代の大型溝が見つかったことから、大国魂神社東側京所周辺に国庁が置かれ、国分寺市に武蔵国分寺が造営されかけていた時代に、東府中にもなんらかの古代の役所的な施設が存在していた可能性が出てきました。

区画溝は今回の調査地区を南東コーナーとして、西と北に延びていました。このことから、この溝が囲もうとした施設は、平和通りと国道20号線の交差点周辺に存在するものと考えられますが、この付近の調査があまり進んでいないため、その施設の実態・性格は明かとなっていません。しかし、溝の上幅で約４ｍ、底の幅で約３ｍ、深さが約２ｍを計る京所国庁周辺でも滅多にみられない大きさのものであることから、役所（武蔵国府か多磨郡衙（ぐんが）クラス）に関わる施設といえるでしょう。また溝については、出土した土器から奈良時代の前半頃と考えられ、修復などの維持の跡を残さず埋まっていることから、短命であったものと考えられます。それと、普通はこのような大きな溝の場合、多くの人々が場所を分担して掘ったものと考えられ、これを示すと考えられるような跡が残っている場合が多いのですが、この溝については分担境があまり目立たず、丁寧（ていねい）に掘られたようです。これは、溝の掘り下げについても言え、多くの場合溝底に少量は掘り残しの土がみられるのですが、この溝の場合、きれいにさらわれていました。





以上、京王線東府中駅北側で新たに見つかった大型の溝についてお話ししたわけですが、この発見は武蔵国府を考える上で、大きな意味を持っています。すなわち、近年国府が都を真似（まね）た碁盤（ごばん）の目のような町並みではなかったと言われはじめていますが、国庁は京所と呼ばれている一帯のどこかにあるわけですから、国庁から１㎞以上離れた場所にまで、このような大きな溝で囲まなくてはならない役所があることは、国庁を中心とした役所郡と工房・宅地によって構成された、一般的な集落とは異なる「国府集落」とでも呼ぶべき広域な集落の存在を想定すべきだということ。また、国庁から非常に離れた部分まで、このような施設が存在していたことは、京所周辺にはより多くの役所施設が集中しているものと考えられ、京所周辺における小規模な調査で、大型の建物などが見つかっても、100m四方はあるとされる国庁の一部だと認定するには、他の役所の存在も考えるならば、慎重さが要求されるということ、が明らかになりました。（若松町１丁目・住友東府中ガーデンハウス地区の調査から　荒井）

あれこれ

—わくわく惑星めぐり—

金星・愛の美の女神

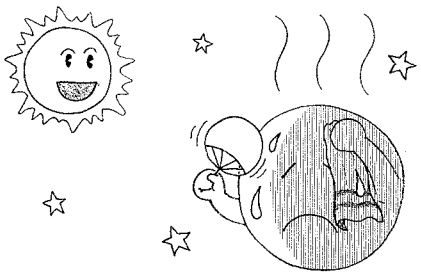
今夏、夕方の西空に、ひときわ明るい星が一番星として輝いています。この星は地球と同じ太陽系の惑星のひとつ「金星」です。「宵の明星」や「明けの明星」として、みなさんもよくご存じでしょう。さて、なぜ金星は夜中の星空には姿を見せないのでしょう。この惑星は、地球の公転軌道の内側をまわっているので、いつも太陽の近くにいるように見えます。そのため、この星が太陽の東側にいると宵の明星として夕方の西空に、逆に西側にいるときは明けの明星として日の出前の東の空に見えるのです。大昔の人々はそれぞれの明星を別の星だと考えていたので、ふたつの呼び名を与えたようです。

金星は、美しく強烈な輝きを放つことから、西洋では古代ローマにおける「愛と美の女神」の名前をもらい、ビーナスと呼ばれています。では、金星とは一体どんな惑星なのでしょう。果たしてその地表には女神たちの住む楽園が広がっているのでしょうか？

金星を望遠鏡で観察しても、表面が厚い大気に覆われているため、その地表面を見ることはできません。このことから、昔の科学者の中には「金星には石油の海がある」とか「緑の大地を恐竜がのし歩き、その様子はまるで太古の地球と同じだ」などと考える人々もいたようです。

しかし、1960年代からさまざまな金星探査が行われるようになり、少しずつその様子が解明されてきました。探査で得られたデータによると、金星の大気はほとんどが二酸化炭素で、地表は約90気圧、温度は400℃以上という灼熱地獄になっています。地球より太陽に近いというだけで、こんなにも環境が違ってしまうものなのでしょうか。実は大気の成分の違いも原因となっているのです。二酸化炭素の厚い大気は、可視光線はよく通しますが赤外線は吸収してしまいます。つまり、太陽からの可視光線は金星面に届き吸収されますが、金星面から外へ出るときには赤外線となるため、二酸化炭素の大気に吸収され気温を上げるのです。これはここ数年地球でも問題となっている「温室効果」という現象です。金星の灼熱地獄はわたしたちの大切な地球の遥か遠い未来なのかもしれません。

金星は、その美しい輝きからは想像もつかないほど内なる激しさを持ち合わせた天体だったのです。　（B－hi）



コラム

沖縄県・西表島で、日本では見られない科に属するホタルの仲間が発見されました。また一方、同島での本格的なイリオモテヤマネコの保護活動が始まりました。新たに記録される者と絶滅が心配されるほどに少なくなっていく者。同一の環境下でも、まさに正と負の両面が時を同じくして起こり得るものだと痛感しました。意外なことに、地元には〝自然保護優先〟への反発が強いそうで、生活のためにはむしろ開発を歓迎する向きがあると聞いています。時代の流れとともに、日本の生物相も変われば、人々の考え方にも変化が生じます。西表島ではありませんが、新規にホタルが加われば古参のネコは消えていくのでしょうか。

博物館は古い物を扱う所。古い物は時代遅れと言われる前に、新しい感覚で文化を伝えていこうと「あるむぜお」は考えています。　（N）

あるむぜお　第28号

al museo　イタリア語
〝博物館で〟〝博物館にて〟の意

発行日　1994年6月20日

発行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921